

# 地域の期待に応え、 ともに成長して まちを活性化させる

再生から14年——万葉線は、さらなる利便性向上や利用促進への努力を日々続けている。その根底には、沿線住民に愛され、親しまれる公共交通をつくるという確固たる姿勢がある。地域交通の担い手としての使命を、永山樹代表取締役専務に伺った。



万葉線株式会社 代表取締役専務

永山 樹  
Tatsuru NAGAYAMA

## 公共交通全体の試金石という信念

——万葉線は、誕生の経緯を見ても、地域で大切にされている路線ですね。

永山 ええ。前身の加越能鉄道は、路線を廃止し、バス代替で公共交通機関の使命を果たすと表明されました。それを受けて、地域や住民が万葉線存続に向けた取り組みを行い、存続の合意形成が進められた経緯があります。

廃線問題は、実は昭和50年代から繰り返し持ち上がっていました。そのたびに、行政による支援策が練られ、何とか乗り切っていたんです。万葉線という名前は、

高岡軌道線、新湊港線を一体的に呼ぶ愛称として昭和55年に付けられたもので、高岡市、新湊市（現・射水市）などによる「万葉線対策協議会」が設立されて、

地域を挙げて存続に取り組みことが決まりました。しかし、利用客の減少は止まらず、平成10年に加越能鉄道が正式に撤退を表明し、すでに結成されていた市民団体の「万葉線を愛する会」や、新たに設立された「路面電車と都市の未来を考える会・高岡（RACDA高岡）」など、市民が活発な存続運動を続け、存続が決定したのです。これらの団体は、現在も活動を続けています。

万葉線のあり方を検討する中で最も重要だったのは、「万葉線の存続は、自分たち沿線だけの問題ではなく、衰退する地方の公共交通全体の試金石となる」という信念を持って方針を打ち出すことでした。平成13年4月に路面電車としては日本初の第3セクターとして設立し、翌年4月から運行を開始しました。

第3セクターですから、富山県・高岡市・射水市が主体となりますが、経済界や地域の方々からのご厚意で出資金と合わせて1億5000万円も集まり、「住民と一体となった万葉線の運営」の合意形成がなされました。当社も、沿線の皆

さんに愛される、親しまれる万葉線をつくり上げていく姿勢で事業経営に臨んでいます。

——赤い電車には、そうした地域や住民、事業者の思いが込められているんですね。

永山 「アイトラム」は、「愛」や私を表す「アイ」などさまざまな思いを込めて命名されています。デザインを手掛けた工業デザイナーの佐藤康三さんも高岡のまちと路面電車にとっても思い入れのある方で、設計費に限りがある中でなんとか万葉線の独自性を出そうと尽力してくださいました。歴史あるまちに、元気が出るような鮮やかな赤い色の電車を走らせ



ることで高岡の魅力を発信し、活性化していかうと生まれたのがあの赤い電車なんです。

地域と連携する企画乗車券

——市民の方々にとって大切な生活路線であり、高岡市や射水市にとっては観光の移動手段として大きな存在です。

**永山** 日本遺産に認定された高岡市には、国宝の瑞龍寺や古城公園、土蔵造りの商家が連なる山町筋や千本格子が美しい家並みの金谷町など、多くの歴史・文化遺産、観光施設があります。「ドラえもん」の作者、藤子・F・不二雄さんのふるさととしても有名です。また、射水市には海王丸パークをはじめ親水施設が数多くあり、今年1月に公開された「人生の約束」という映画のロケ地ともなりました。

当社では「人生の約束」ロケ地巡り乗車券や「高岡市 藤子・F・不二雄ふるさとギャラリー」特別記念乗車券を販売しました。1日フリーパスのほか一部の施設や店舗で割引になる特典が付いています。

人口減少時代ですから、万葉線も生活路線としてのニーズはどうしても落ちていくってしまいます。乗っていただくということ以外でも、何か地域との絆を深めていくことはできないかと考えました。観光のお客さまには楽しさや利便性を、沿線の施設や店舗には発信と誘客、万葉線は乗っていただく。3者にメリットが出る仕組みをつくらうとスタートさせた企画で、今後も広げていきたいと思っています。

「鉄軌道王国とやま」と言われ、県内の交通機関の連携が強まっていますが、それぞれの地域では、域内の魅力や利便性を高めていかなければなりません。そのためには公共交通事業者と観光施設や店舗の方々の連携が不可欠です。観光施設や店舗など目的地へお客さまを誘導することも、地域の公共交通の大切な役割の一つだと考えています。

万葉線は、地域の支援があつて再生できました。その絆を一つの土台にして、さまざまな形でさらに連携を強めていきたいと考えています。

より地域との絆を深めていく

——万葉線は、北陸新幹線開業の約1年前から高岡駅ビルに乗り入れています。その効果はいかがですか。

**永山** 駅ビルに万葉線が乗り入れるとい

うことに地域の方々が非常に注目してくださって、開業時には本場に多くのお客さまがお越しになりました。ホームが屋内で、待合室もありますから快適です。あいの風とやま鉄道やJR城端線・氷見線との乗り継ぎの利便性が向上し、皆さまにご利用いただいています。

——新幹線の開業効果についてはいかがですか。

**永山** 北陸新幹線で富山県を訪れる人たちが万葉線を利用されています。正確な数字を把握することはできませんが、観光に來られた方々にご利用いただいていると思います。ただ、新幹線の新高岡駅と高岡駅は城端線と路線バスで接続し、万葉線に乗っていただくためには、乗り換えて高岡駅までお越しいただくことになりました。新幹線利用のお客さまに万葉線をもっと利用していただくためには、まだ課題があると考えています。

——インバウンドはいかがですか。

**永山** 増えていますね。「日本遺産」に認定されているということもありますが、高岡は「ドラえもんのまち」としても知名度が上がっています。「高岡市 藤子・F・不二雄ふるさとギャラリー」や当社の「ドラえもん ترام」など、行政も海外で積極的にPRされていますので、今後は一層、外国からのお客さまが増加しそうです。

また、JR西日本・JR東日本がこの4月に、大阪や東京を出発して北陸を周遊する訪日外国人旅行者向けフリー

バス「大阪・東京「北陸アーチバス」」の販売を開始します。このバスを利用する外国人旅行者が万葉線に乗車された場合の割引やプレゼントなど、当社ならではのサービスも考えています。

——万葉線の延伸やJR城端線・氷見線への乗り入れも議論されています。

**永山** まだ具体的な話ではありませんが、平成26年のハイブリッド ترامの実走実験もそうしたさまざまな可能性を探求する一つの取り組みです。実際に営業路線での運行を可能にするためには、多くの課題がありますが、新しいものに挑戦する姿勢は大切にしていきたいと考えています。

万葉線は、まちづくりの中でその存在を大きく位置付けていただいています。そうした地域の期待に応えていくことが、当社にとって一つの使命であると思っています。地域の皆さんと深くつながり、当社は利便性向上や利用促進の努力をさらに重ねる。地域、万葉線それぞれが成長して、その相乗効果がまちの活性化につながることを目指していきたいと思っています。

